

棚尾まちづくり事業

平成 23 年 10 月 27 日（木曜日）

第 4 回 棚尾の歴史を語る会 次第

進行（小笠原幸雄）

1 前回までのテーマに関する参考意見など

弥生の井、盆踊り、火の見やぐら、杉村修平、地震の記録、神楽など

2 テーマ 7 「棚尾橋」

(1) 資料説明（田澤榮一）

(2) 出席者による補足説明、感想など

3 テーマ 8 「源氏橋と棚尾港」

(1) 資料説明（杉浦光雄）

(2) 出席者による補足説明、感想など

4 連絡事項・情報交換など

棚尾史跡めぐり 11 月 3 日（祝） 午前 10 時 八柱神社集合

5 次回日程

第 5 回 11 月 15 日（火曜日）午後 7 時から 「藤井達吉と棚尾」「棚尾駅」

第 6 回 12 月 20 日（火曜日）午後 7 時から 「棚尾村の瓦屋」「加藤平五郎」

棚尾橋の歴史

あらまし

それまで渡しによって兩岸を結んでいたが、棚尾村外一か村橋梁組合が 30 年間の有料橋として、明治 23(1890)年に完成させたのが初代の棚尾橋である。当初は徒歩 1 回につき 4 厘の渡橋料金が必要で別名を「償却橋」といった。

もっともこの橋は明治 26(1893)年 8 月の洪水で落流した旨、棚尾新橋頭取から愛知県知事宛に届けが出されている。どの程度の被害であったかは不明。この橋建設を記念した、「棚尾橋架橋碑」(明治 31(1897)年建立)が光輪寺にある。

この橋が出来たことにより、川を挟んでの東西の往来は容易になったのであるが、なにごと 1 回通る毎に料金がかかるので、碧南側の農民で川向こうに農地をもっている人などから、一刻もはやく無料で通れる橋の建設が切望され、期成同盟会が結成された。

現在、八柱神社境内に太鼓橋があるが、それは大正 8(1919)年 9 月棚尾橋償却年期終了を記念して作られたものである。この橋の南側の石柱にこのことが刻まれている。

その夢叶って出来たのが二代目棚尾橋である。この橋は大正 10(1921)年に工費 26 万円位で建設された。主要部分に鉄筋コンクリートを用い当時としては県下でも模範的な橋であった。この橋の記念碑が蜷川の上流側の志貴崎橋の東のたもとに立っている。

昭和 30(1955)年 8 月に竣工した三代目棚尾橋は二代目の橋脚を生かし上部構造のみを改修したもようである。

現在の四代目の橋は昭和 42(1967)年 3 月竣工したもの。今年で 44 年経過したことになる。

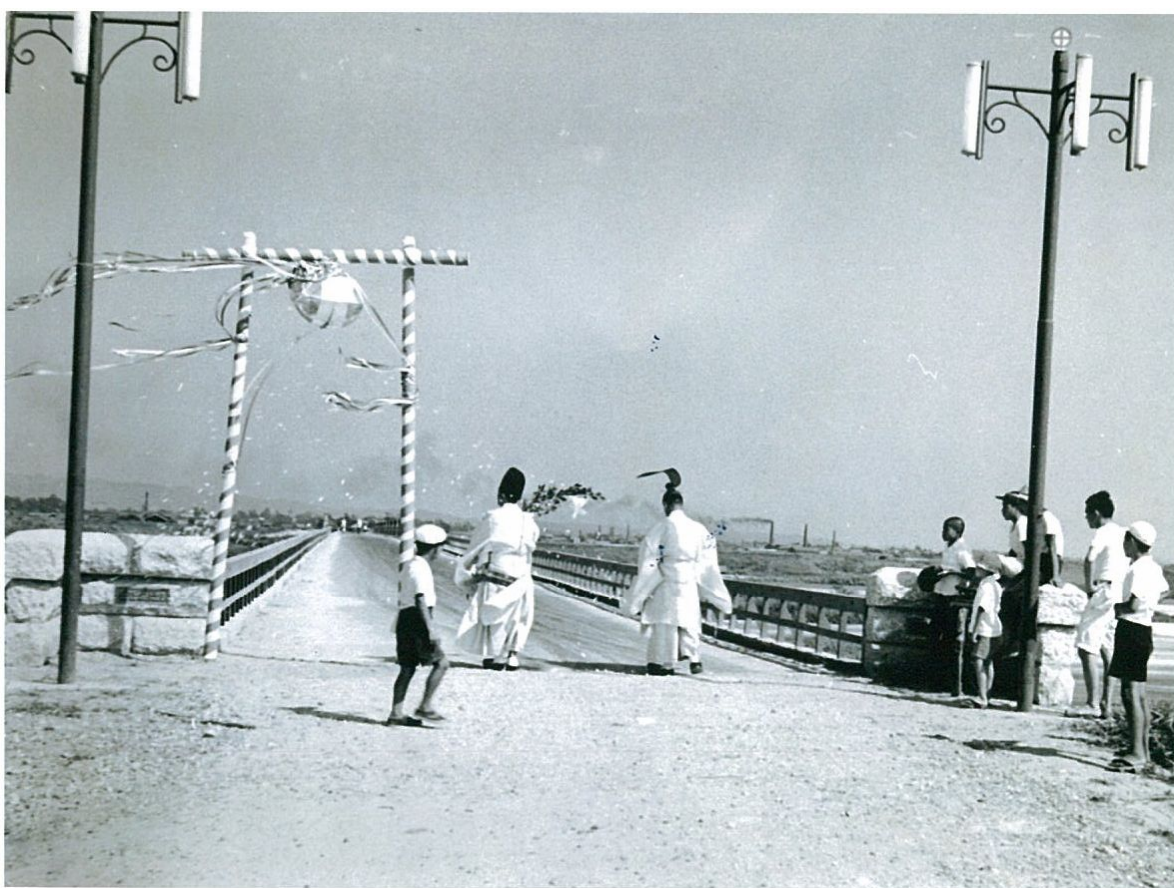
この橋の少し上流側に矢作川の水が浅いとき、二代目の棚尾橋建設時の橋脚の根本が 2 列に並んでいるのを見ることができる。

初代





二代目



三代目

二百三十六間為矢矧河口之第一橋明治二十一年八月起工至其二十三年三月成焉近邑有志者之所架設也初橋之末架來往皆由舟也人不勝其煩加以道路狹惡風晨雨夕行人艱少其到河津或有不得渡而空返者況河西農民有田於河東者耕耘灌溉荷鋤擔畚而渡河其勞果如何哉棚尾人小笠原六右衛門永井長三郎石川忠四郎齊藤長七石川宗七大濱人角谷半次郎村松文七諸子憂之首唱架橋之議與贊成者三十余人戮力經營遂得以成其事而其道路亦尋見改修今也坦途接長橋人車馳焉馬車走焉老幼婦女行賈旅客來往者項背相望交通之利日開月盛無復訛煩與勞者皆諸子之惠也雖然其至尾此者豈一朝一夕之業哉初將架橋抗議羣起甚則有論爭於公庁者其起工后十季之間漂流于洪水者之崩壞于地震者一因厄之事不為少而諸子不屈解紛排難遂得有今日可謂勉矣今也永井齊藤角谷三子既逝矣其存者亦將漸老而他日橋之宣修理必有急於今日者於是有志者相謀將建碑記其顛末以後之繼其志者囑文于予不文固辭矣

聽乃略叙所感為之銘銘曰

蹟而益振 成功濟民 濟民繼仁 繼在後人

明治三十一年九月 文学士清沢滿之撰 池田友八郎書

星野守一鐫

架橋碑正面左下部

贊成者

碧海郡棚尾村 杉浦忠造
小笠原源兵衛 柴田甚平
鈴木嘉兵衛 三島松平
井上傳兵衛

小笠原勘六 三島德平
井上弥七 齊藤弥十
小笠原和三郎 長田清七
小笠原曾助 小笠原喜一郎
平岩伊平 小笠原文右衛門
石川弥七 小笠原助三郎
角谷龜吉 金原梅吉
川口金次郎 碧海郡矢作町
杉浦十三郎 岩月藤作
長田金弥 知多郡成岩町
石川源七 小阪久之助
齊藤倉吉 碧海郡志貴崎村
棚原弥十 多田徳助
棚原文三郎 永坂昇太郎
黒田光太郎

生田彦十
齊藤広吉
平岩伊助
小笠原松二郎
金原利左衛門
金原梅吉



高242cm×幅170cm

棚尾橋架橋碑

所在地 志貴町二丁目（棚尾光輪寺境内）
建立年月 明治三十一年九月
建立者 有志

表面

架橋碑

（正面の頭部横書）

棚尾橋之碑 愛知県知事從四位勲四等江木千之丞額棚尾新橋長

文字拡大版
※略賛成者名

二百三十六間為矢矧河口之第一橋明治二十一年八月起工至其二十三年三月成焉近邑有志者之所架設也初橋之末架來往皆由舟也人不勝其煩加以道路狹惡風晨雨夕行人艱少其到河津或有不得渡而空返者況河西農民有田於河東者耕耘灌溉荷鋤擔畚而渡河其勞果如何哉棚尾人小笠原六右衛門永井長三郎石川忠四郎齊藤長七石川宗七大濱人角谷半次郎村松文七諸子憂之首唱架橋之議與賛成者三十余人戮力經營遂得以成其事而其道路亦尋見改修今也坦途接長橋人車馳焉馬車走焉老幼婦女行賈旅客來往者項背相望交通之利曰開月盛無復詆煩與勞者皆諸子之惠也雖然其至尾此者豈一朝一夕之業哉初將架橋抗議羣起甚則有論爭於公厅者其起工后十季之間漂流于洪水者之崩壞于地震者一因厄之事不為少而諸子不屈解紛排難遂得有今日可謂勉矣今也永井齊藤角谷三子既逝矣其存者亦將漸老而他日橋之宣修理必有急於今日者於是志者相謀將建碑記其顛末以後之繼其志者囑文于予不文固辭矣

聽乃略叙所感為之銘銘曰

蹟而益振 成功濟民 濟民繼仁 繼在後人

明治三十一年九月 文学士清沢滿之撰 池田友八郎書

星野守一鐫

※岡島良平氏読み下し文

初代

棚尾橋架橋碑文

所在地 棚尾本町一丁目

光輪寺敷地内（けんしん駐車場から碑の上端部が見える）

架橋碑

棚尾橋之碑

棚尾新橋ハ長サ 二百三十六間^{ケン}、矢矧川^{ヤハギ}（矢作）河口ノ第一橋トナス 明治二十一年八月起工シ至リテ其ノ二十三年三月成ル、近邑^{ユウ}（村）有志者ノ架設スル所ナリ

初メ 橋ノ未ダ架セザル往来ハ皆舟ニ由ルナリ 人其ノ煩ニ勝エズ^タ

加フルニ道路狭悪ヲ以テ 風ノ晨^{アレタ}、雨ノ夕^{ユウベ}、行人ノ艱少ナカラズ

其ノ河津ニ到ル 或イハ渡ルコトヲ得ズシテ空シク返ル者有リ況ンヤ

河西ノ農民、田ヲ河東ニ有スル者、耕耘灌漑鋤ヲ荷イ^{ニテ}

畚^{フゴ}（モッコ）ヲ担ギテ河ヲ渡ル 其ノ労果シテ如何ゾヤ 棚尾ノ人

小笠原六右衛門 永井長三郎 石川忠四郎 斉藤長七 石川宗七

大浜ノ人角谷半次郎 村松文七ノ諸氏 之ヲ憂イテ架橋ノ議ヲ
首唱ス トモニ賛成スル者三十余人 カヲ戮^{アツ}セテ経営シ 遂ニ以テ
其ノ事ヲ為スヲ得タリ 而シテ 其ノ道路亦尋^ツイデ 改修ヲ見ル
今ヤ担途（広い道）ハ長橋ニ接シ人車馳セ馬車走ル 老幼婦女ノ
賈^{コリョ}旅来客ヲ行フ者項背（うなじと背中）相望ミ 交通ノ利日ニ開ケ月ニ盛ナルコト
又煩ヲ説クナシ トモニ勞スル者 皆諸氏ノ恵ナリ
然リト雖モ其ノママニ至レル者 豈^{アニ}一朝ノ業ナランヤ
初メニ架橋ノ抗議ヲモツテ群起甚ダシキハ即チ論争ノ
公庁ニ於ケル者 其ノ起工後十年（季ニ非ズ季ナリ）ノ間
洪水ニ漂流スル者三 地震ニ崩壊スル者一 因厄ノ事少シトセズ
而シテ諸氏屈セズ紛ヲ解キ 難ヲ排シテ遂ニ今日有ルヲ得タリ
勉ナリト謂フベシ 今ヤ永井齊藤角谷ノ諸氏既ニ逝ケリ
其ノ存スル者モ亦マサニ漸ク老イントス 而シテ他日橋ノ宣修理スベキ
必ス急アルベシ 今日ニ於テ是^{ココ}ニ於テ有志者相謀^{ハカ}リ建碑ヲ将^{モツ}テ
其ノ顛末ヲ記シ以テ 後ノ其ノ志ヲ繼グ者 文ヲ予ニ囑ス
予ハ不文ニシテ固辞スルモ聴イテ乃チ聞ク所ヲ略叙シ之ヲ

銘トナス 銘ニ曰ク

躋イテ益ニ振リ 功成リテ民ヲ濟フ 民ヲ濟フハコレ仁ナリ繼グ後人アリヤ

明治三十一年九月 文学士清沢満之撰 池田友八郎書

星野守一 鐫



奉

大正八年己未九月

< 1919年 >



正面

八柱神社太鼓橋



側面



納

棚尾橋償却年期終了記念

棚尾橋記念碑

建立年月 昭和三年十二月

建立者 江東耕作農民

所在地 舟江町二丁目（旭 中江）



高270cm×幅118cm

表面

棚尾橋記念碑

正三位勲一等 濱口雄幸書

裏面

棚尾橋ノ記

矢作川長流衣浦ニ注グ処碧海幡豆二郡交通ノ用路ニ當ル明治二十三年始テ官ニ請ヒ期ヲ限リ木橋ヲ架シ通行ノ便ニ資ス然レトモ

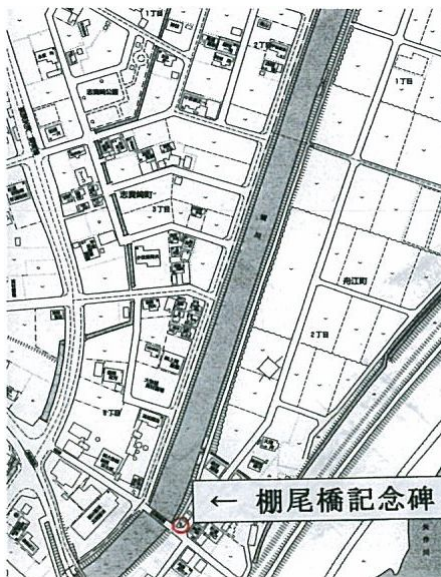
一組合ノ経営ニ属シ賃取橋ヲ免レズ殊ニ農家ハ江東ニ耕地ヲ有ス者毎歳若干ノ貨ヲ納レ朝夕業ニ服セザルヲ得ス橋無キニ勝ルモ固ヨリ公橋無貨ニ如カズ大正八年会々旧橋経営期満ツ以テ村民志アル者相謀リ之ヲ官ニ移シ時世ニ応ズル橋梁トセント棚尾橋期成同盟会ヲ組成シ長崎重治会長永井治郎平副会長ノ任ニ就キ官ニ訴ヘ議ニ諮リ百方斡旋至ラザルナク且村民有志ニ募財シ之ヲ官ニ献ズ是ニ於テ官議其ノ要望ヲ容レ大正九年八月新橋ノ工ヲ起シ同年極月工ヲ竣フ橋身式百式拾五間幅員三間主要ノ部分ハ鉄筋混凝土ヲ以テス工費凡式拾六万円内篤志ノ棄財老万数千円碧幡二郡ノ負担七万六千余円他ハ県費ノ補助ニ出ズ体裁美耐久質洵ニ県下橋梁ノ範タリ惟フニ人文ノ進展ハ交通ノ便利ニ俟ツタ多シ此橋完成ハ西三繁栄ノ一因ヲ成シ亦以テ我國運ノ隆昌ニ資ス大ナリ豈啻ニ一部農家ノ煩ヲ去リ人車往還ノ安易ヲ悦ブノミナランヤ略由來ヲ記シ之ヲ碑陰ニ勒ス

昭和三年十二月

蕙斎尾平信敦書

建碑者 江東耕作農民一同

西端杉浦茂民刻



二代目

棚尾橋記念碑文 所在地 蜷川志貴崎橋東

表面

棚尾橋記念碑

正三位勲一等 濱口雄幸書

裏面

棚尾橋ノ記

矢作川長流衣浦ニ注グ処 碧海幡豆ニ郡交通ノ用路ニ當ル 明治二十三年始テ

官ニ請ヒ 期ヲ限リ木橋ヲ架シ 通行ノ便ニ資ス 然レトモ 一組合ノ經營ニ属シ

貨取橋ヲ免レズ 殊ニ農家ハ江東ニ耕地ヲ有ス者 毎歳若干ノ貨ヲ納^イレ 朝夕業ニ服セザルヲ得ス 橋無キニ勝ルモ 固ヨリ公橋無貨ニ如カ

ズ 大正八年会々旧橋經營期滿ツ 以テ村民志アル者相謀リ 之ヲ官ニ移シ 時世ニ応ズル橋梁トセント 棚尾橋期成同盟会ヲ組成シ 長崎

重治会長 永井治郎平副会長ノ任ニ就キ 官ニ訴ヘ議ニ諮リ 百方斡旋至ラザルナク 且村民有志ニ募財シ 之ヲ官ニ献ズ 是ニ於テ官議

其ノ要望ヲ容レ 大正九年八月新橋ノ工ヲ起シ 同十年極月工ヲ竣フ 橋身二百二十五間 幅員三間 主要ノ部分ハ 鉄筋混凝土ヲ以テス

工費貳拾六万円 内篤志ノ棄財壹万数千円 碧幡ニ郡ノ負担七万六千余円 他ハ県費ノ補助ニ出ズ

体裁美耐久質洵ニ県下橋梁ノ範タリ 惟^{オモ}フニ人文ノ進展ハ交通ノ利便に俟ツタ(処?)多シ 此橋完成ハ西三繁栄ノ一因ヲ成シ 亦以テ我国

運ノ隆昌ニ資ス大ナリ 豈アニタダ啻ニ

一部農家ノ煩ヲ去リ 人車往還ノ安易ヲ悦ブノミナランヤ 略由来ヲ記シ之ヲ碑陰ニ
勒ス

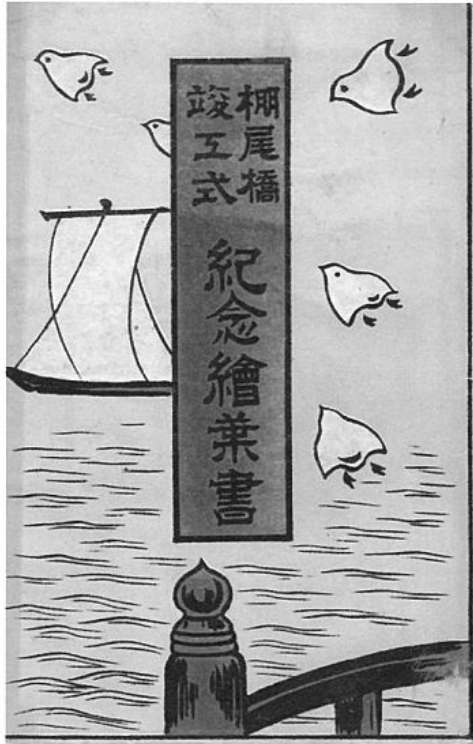
昭和三年十二月

蕙齊尾平信敦書

建碑者 江東耕作農民一同

西端杉浦茂民刻

期成同盟発行の棚尾橋竣工式 記念繪葉書



碧海と幡豆の境の矢作川
かけし新橋は棚尾はし

貳拾五萬円の工事費で
鉄筋コンクリートトラス式



川なれば三河第一矢作川
渡て見たいは棚尾はし

今は工事中で千鳥奈く
出来たら盛な橋渡り



悠紀地方いとも名高き矢作川
弓張月の影さして

渡り初めたる棚尾橋
清き流れに知登り奈く



写真資料

初代棚尾橋



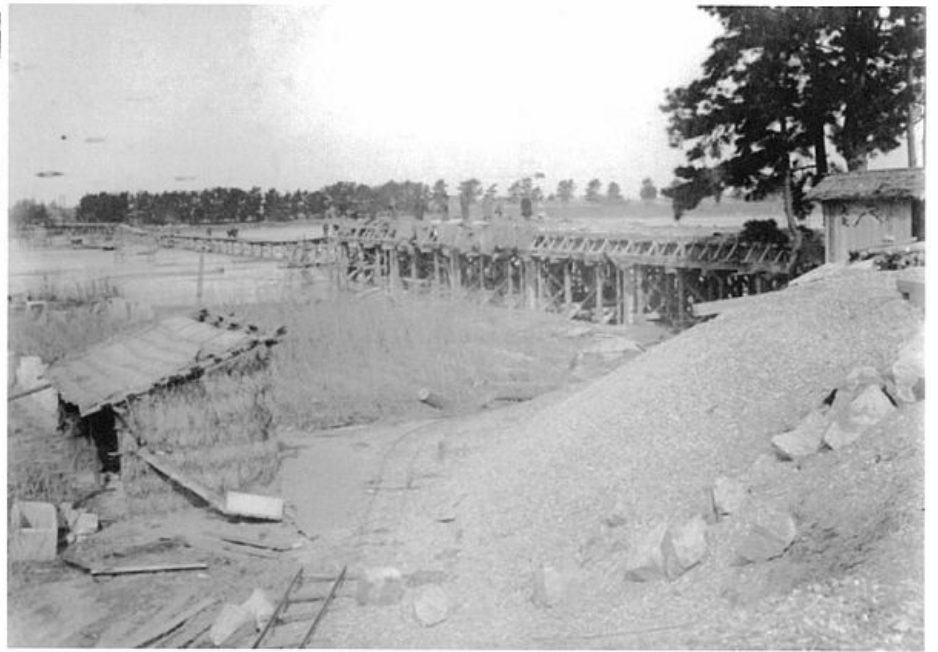
二代目棚尾橋



橋脚工事



↑ 二代目棚尾橋の工事
風景を眺めているので
あろう

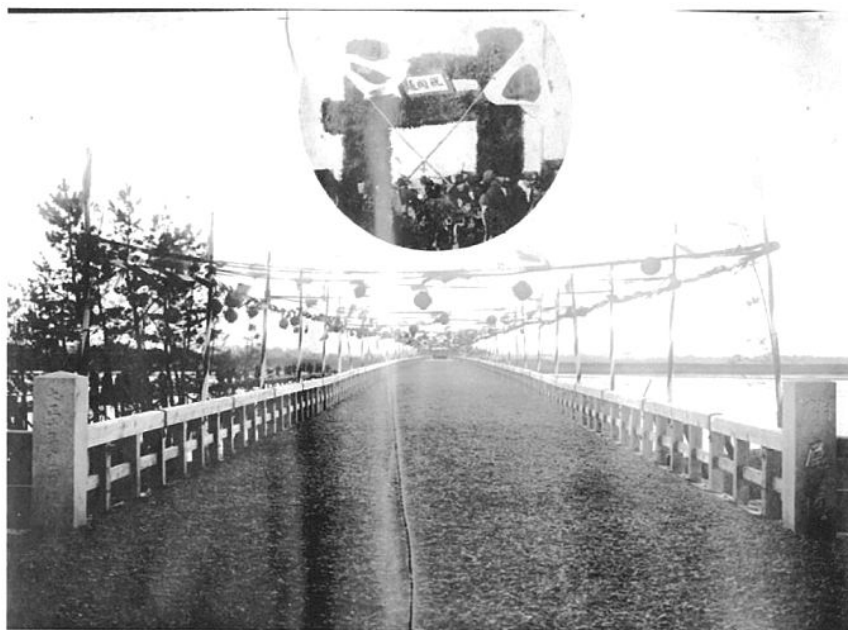


左方 初代の橋

右方 ほぼできあがってきた二代目の棚尾橋



完成なった
二代目棚尾橋

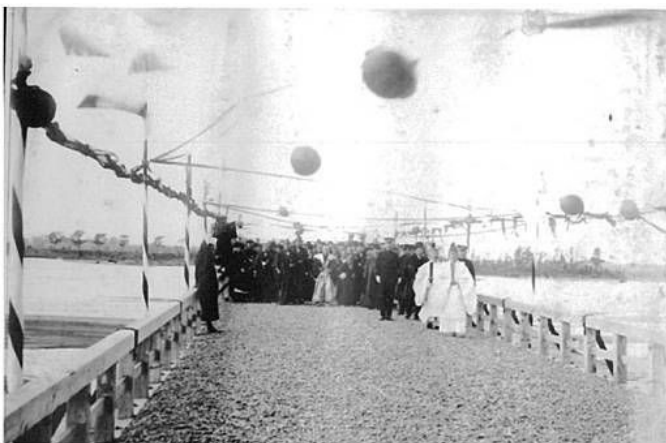


アーチの文字
開通式

標柱の文字

左 大正十年十二月

右 棚尾橋



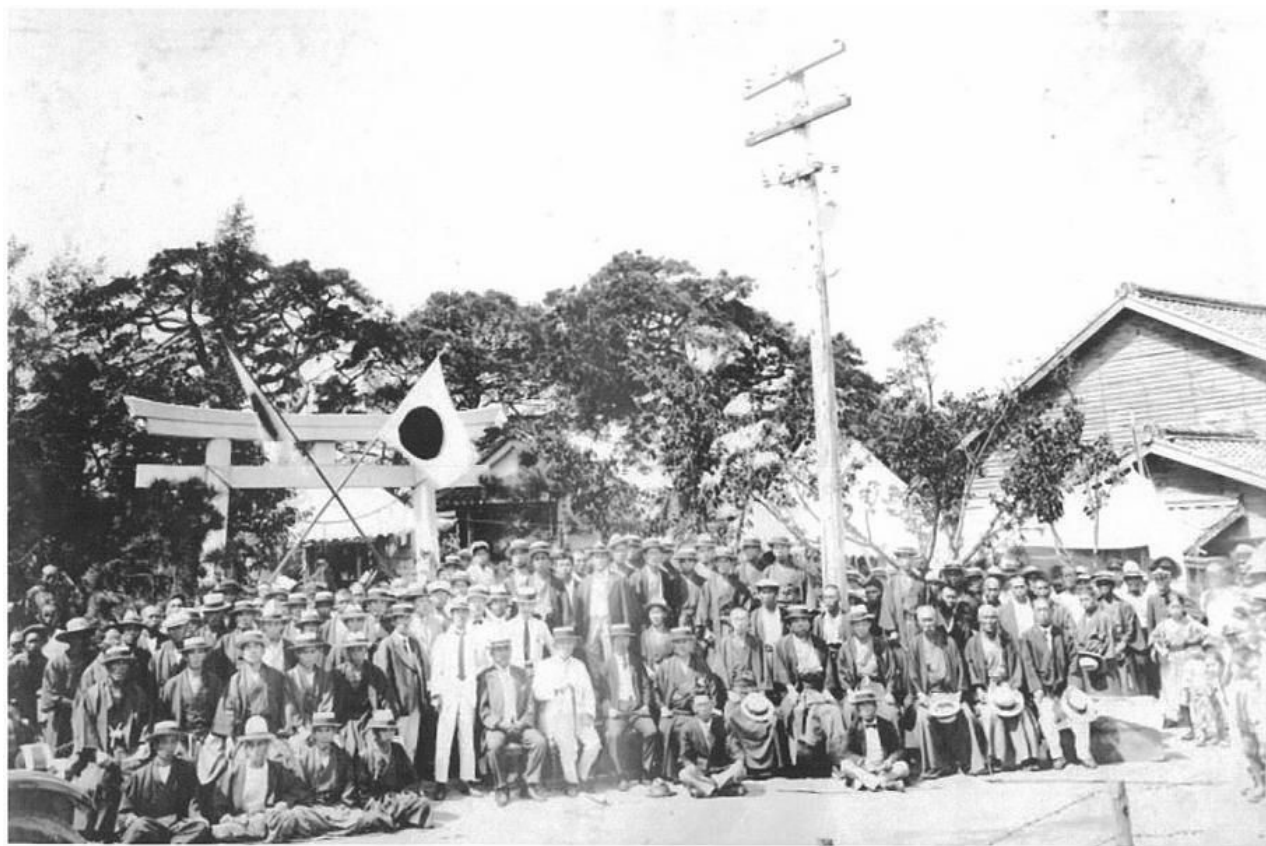
神主さんを先頭にした渡り初め式であろう



祝賀アーチ



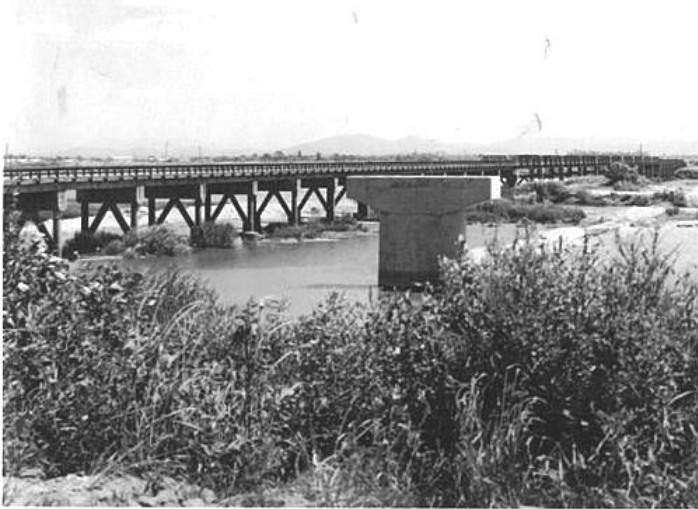
祝賀の踊り 場所は棚尾の目抜き通りだろう



八柱神社前での関係者の記念写真

三代目棚尾橋

昭和 3 0 (1955)年
8 月 1 日竣工 現在
の橋（四代目）は昭
和 4 2 (1967)年 3 月
竣工



棚尾橋右手の橋脚は現在の橋のもの
左の二、三代目の橋脚の根っこが水位
の低い時、今の橋のすぐ上流に現在も
姿を現す。平成 1 9 年夏、危険防止の
ため、黄色のブイがその根っこに取り
付けられた。水面下になっても、その
位置がわかる。



碧南側から西尾側を望む



2009 年頃、西尾側の半分が撤去された。碧南側
は少し残っている。

届証

2
3
—
3
6
1

一 棚尾新橋

右愛知縣下碧海郡志貴崎村大字
伏見屋外新田字中江ヨリ同縣下幡豆郡
平坂村大字西小棚新田エ跨ル棚尾新橋
本月十八日午後四時二十分頃洪水ノ為メ
落流致候間此段御届候也

棚尾橋頭取

棚尾村八百十七番戸

明治廿六年八月十九日

小笠原六右衛門

愛知縣知事 時任為基殿

前書之通届出候也

明治二十六年八月十九日

愛知縣碧海郡棚尾村長名倉吉次郎

御検査願

一 棚尾新橋

愛知縣下碧海郡志貴崎村
大字伏見屋外新田字中地先
ヨリ幡豆郡西小棚新田エ架橋スル
棚尾新橋先般落流候儀届
置候処然者流木ヲ大略取揃候間
一 忖御検査被成下度候段奉願候也

明治廿六年九月二日

碧海郡棚尾村八百十四番戸

小笠原六右衛門

碧海郡長坪井義衛殿

前書之通願出候也

明治二十六年九月二日

愛知縣碧海郡棚尾村長 名倉吉次郎

棚尾橋の話

ここである棚尾橋は、大浜から棚尾へ行く道の途中の堀川にかかる源氏橋のことである。矢作川に棚尾橋ができたのち改称された。

以降、棚尾橋というのは、堀川にかかる橋のことである。

棚尾橋のことは、大浜村や棚尾村から時の領主に出された、村明細帳を資料として考えるのがよい。

それによると、棚尾橋は板橋で、その長さは六間壹尺、巾は七尺、板の厚さは貳寸である。また、橋の橋脚は、橋杭四組・壺組に三本とあり、あわせて考えれば棚尾橋がイメージできよう。

橋の修復や架替については明細帳に、

「是は大浜村・棚尾村立会、両村より普請仕候。尤、入用の儀は、両村浜方より相勤申候。但、人足は両村高掛けにて相勤来申候。」

とある。浜方とは、塩田業者をさすのだろうか。そう推定する根拠は棚尾村の『浜方名寄帳』である。そこには塩田所有者の名前と塩田一筆ごとの



現在の源氏橋。橋の向う側は、棚尾の源氏。堀川下流側より望む。この橋の附近水面は、棚尾港といって、当地の産物が小船によって積み出された。今は使われていないが当時の面影をしのぶことができる。

面積が記されている。また、人足は両村高掛とあるが、村高の割合に



源氏橋を棚尾側より望む。この橋の附近は、かつては塩田であった。すぐ隣の「塩とり橋」の名によって往時をしのぶことができる。

よって人足を提供するきまりになっていたのである。ちなみに、天保の終わりごろの村高は、大浜村二八五六石余、棚尾村一二四六石余であった。いずれも新田を含んでいる。

なおこの棚尾橋は『村誌碧海郡棚尾村 明治十三年（一八八〇）』によれば「修繕費用官に属す。」とある。

矢作川に棚尾橋が出来たのは明治二十三年（一八九〇）であるが、紛らわしいので、堀川の棚尾橋は、源氏橋と改称された。ただし、『濃尾震災に関する書類』のなかに「棚尾橋 長六間三尺 巾七尺」とあり、明治二十五年（一八九二）二月と記されているので、源氏橋と改称されたのはそれ以降ということになる。

この橋は大浜から棚尾へ、さらに岡崎へとつながる往還にあり、この界限の人々にとって馴染深い橋である。附近の景観はすっかり変わってしまったが、今日も往来する人や自動車は多い。

参考資料 『正徳元年（一七一） 大浜村高反別差出帳』

『宝暦十二年（一七六二） 棚尾村明細帳』

『天保十二年（一八四二） 棚尾村高反別差出明細帳』

使用した資料は、碧南市市史資料室所蔵のものである。

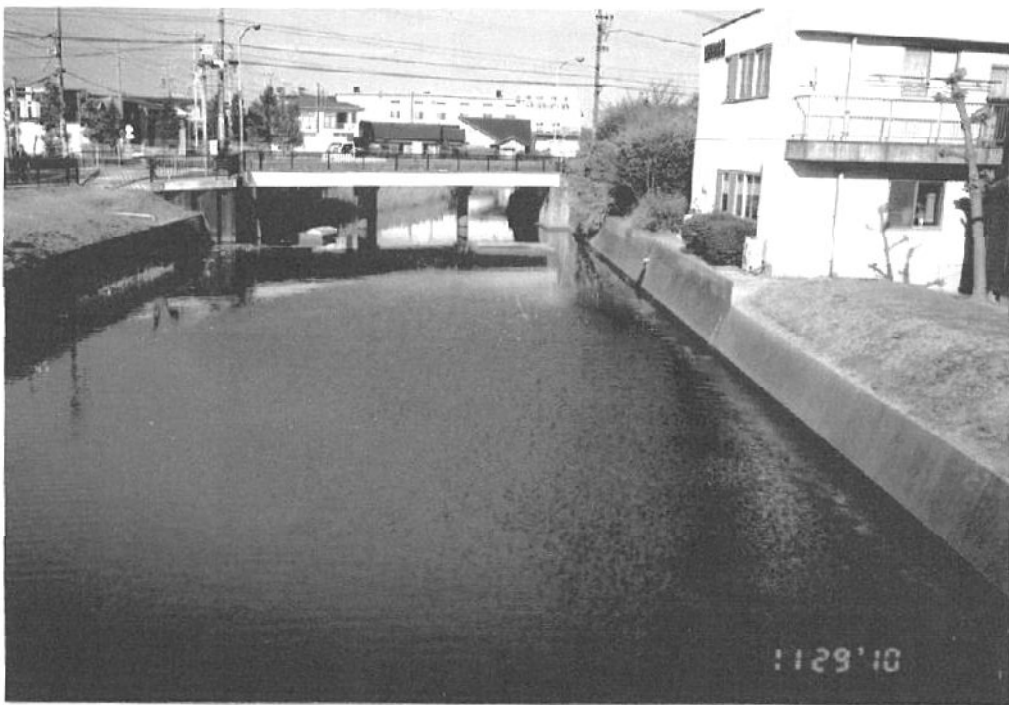
【地方史の話題 二】二〇一〇年十二月二日

川 港・棚 尾 港

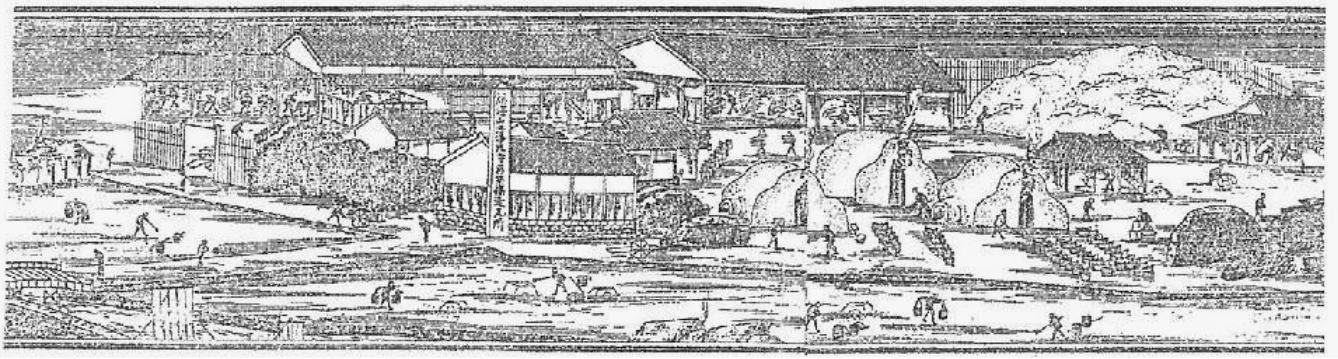
大浜漁港から東へ延びる一本の川がある。この川は、寛永五年（一六二八）、大浜村の石川八郎右衛門が、領主本多下総守の許可を得て、開削した堀川であると伝えられている。塩田開発の為と言われる。棚尾村の瓦屋集団が製造した瓦は、小船に乗せられてこの堀川を下り、衣ヶ浦に浮かぶ廻船に積み込まれた。そして、はるか江戸まで運ばれていった。

棚尾村が町になるのは大正十三年であるが、その前年八月、町制施行の下調べとして『運輸交通調』がなされた。それには「海上ノ便ハ棚尾港ヲ発シ、半田港及ビ武豊・熱田・名古屋ノ各港ニ至ル。船舶ノ出入頻繁ニシテ、運輸交通ハ一層ノ利便ヲ得、益々向上発達ノ趨勢ヲ見ル……」とある。

同年八月末調べによると、棚尾港よりの積出しは七一八七トン、到着品は九二〇二トンであった。積出しの主なものは、醤油七六八トン、味噌四一五トン、瓦七二二トン、土管・焔炉五〇七七トンで、到着品は、大豆一四八〇トン、塩一一八五トン、大豆粕一八一四トン、石炭二九六三トン、其他の肥料一二〇〇トンであった。



旧棚尾港あと。塩とり橋から源氏橋をのぞむ。



これは瓦屋永坂全兵衛家を西から見たもの。工場の前面に塩田が広がっている。左に源氏橋（当時は棚尾橋といった。）が見える。川には船がはいっている。帆が見えるが、堀川には橋があるから、航行のさい障害となるのではないか。船がはいっていることが、よくわかるように、作者が帆を描きいれたとも考えられる。（『三陽商工便覧』明治21年）

これらの品目から近辺の工場群が浮かびあがる。塩田跡にできた味噌・醤油工場、瓦・土管・焔炉工場、味噌工場である。

この調べには、比較のために大浜港駅の数字が記してある。積出しは七三六二トン、到着品は四二四八トンである。

すでに、鉄道の時代は始まっているのだが、三河鉄道は、まだまだ輸送力がたりなかったので、船に頼っていることがわかる。

ずっとのちの第二次大戦後も、堀川沿いには焔炉屋があつて、船が燃料などを運んでいた。

参考までに、新川の例を付け加えておこう。新川は油ヶ淵廻りの新田の排水を目的に開削された堀川である。新川の両岸には数多くの瓦工場があつて、黒煙を上げていた。出船・入船も数多く、運ばれた製品も大変な量になるだろう。技術革新によつて瓦工場の閉鎖が相次ぎ、今は昔の面影もない。時代の流れを感じるだけである。

（碧南市 杉浦光雄）